

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 津島佑子の後期作品における表現手法と小説美学

氏 名 曹 榮峻

論 文 内 容 の 要 旨

半世紀にわたって旺盛な執筆活動と文化交流を続けてきた津島佑子が2016年に没したことにより、彼女の膨大な作品世界に対する包括的かつ多角的な研究が求められている。しかし、現代の日本文学を代表する女性作家の一人であるにもかかわらず、津島文学の研究はまだ特定のテキストに集中されており、多少狭い枠組みから行われてきた。本研究では津島が文学的外縁を広げた後期作品を研究の対象として、既存の津島文学研究の隙間を埋めながら、後期作品に対する美学的価値を評価し、文化的実践のテキストとして津島文学の意義を探っている。そのため、津島文学の独特な表現手法と物語装置を多角的に分析する一方、強い世界性が内在している津島文学の多元性と他者性に注目した。それから作品に発揮された津島文学の流儀が、彼女が穿鑿してきた問題と如何に絡み合っ、どのような意味合いを生み出しているのかを考察し、テキストの新しい解釈の可能性を引き出そうとした。

本研究は二部八章からなっており、一部(一～四章)では津島文学の表現手法と美学を、二部(五～八章)では津島文学の世界観と倫理美学を重点的に扱っている。

まず第一章では、津島の後期作品に表れているマジックリアリズム的な要素を捉え、その技法的特性と世界観を分析することで、津島文学におけるマジックリアリズムの意味と美学的効果について論じた。本章を通して、理性と合理主義の伝統を突き崩し、現実世界を拡張する一方、単一の時代と民族を超えた多元的な物語に、多様な地域の土俗性と神話的イメージを融合させ、作品のクレオール性を構築したことを述べ、日本文学界におけるその独自の文学世界の評価を試みた。

第二章では、津島の『狩りの時代』の物語の深層を読み解き、近代世界において蔑まれた対象の価値の回復が試みられていることを論じながら、その表現方法と文化表象について考察した。本章を通して、『狩りの時代』で見られる文学的魔術と神話的思考は近代の中心言説を揺るがし、科学と理性中心の基準によって劣等なものとなされた他者の身体と感覚の復権を図っていることを明らかにした。

第三章では、『葦舟、飛んだ』の中核となっている満州から引き揚げられた女性の悲劇的な事情の話をクローズアップし、忘れられそうになった個人の外傷記憶を物語る方法とその意味について論じた。本章からは、数奇な一人の女性の話に共感できる複数の人物が、それぞれ語り手と聞き手の役を演じ、有機的な協

力という形で歴史化できなかった雪ババの友人の話を現前化しており、物語化された歴史的記憶の伝承を図っていることを明らかにした。

第四章では、『ヤマネコ・ドーム』の主人公たちのトラウマとなった混血少女の死をめぐる真相と関連して、作中に働いている記憶と忘却のメカニズムに注目し、日本の戦後社会の暗部を掘り下げた本作の物語原理について考察した。本作で過去のトラウマと向き合おうとする主人公たちの続く回想(記憶)と弱者を保護するためのテキストの忘却は物語世界の幻想と絡み合っていて交差するが、それから社会的弱者に対する責任意識と救援の意志を込めた新たな言説が形成されていくことがわかった。

第五章では、『ジャッカ・ドフニ』の様々な背景を持つ登場人物の性格と文化的複数性に注目し、越境するマイノリティの動態と異なる集団の関係性を考察することで、友情と共生の精神を通じて現れるテキストの今日的意味を探った。ディアスポラ的な歩みを見せる本作の登場人物たちは互いを頼りに運命の共同体を形成するが、異文化との接触と異質的集団との関係形成においても個々の主体の特殊性と固有性は守られており、複数の世界観が平和的に共存することが見られた。

第六章では、『黄金の夢の歌』で他者化された存在である遊牧民族に寄り添い、暴力的な近代性と対峙し反国家主義的で脱民族主義的に現れる津島の世界観を分析した。近代世界と国家主義へ批判的な作者津島が投影された主人公の眼差しから、これと相反する価値が示されている遊牧民の世界への憧憬を見据えており、遊牧民の口承文化の影響を受けた「夢の歌」は時代と民族を超越して多様な世界の他者が遭遇する神話的な場になっていることを説いた。

第七章は、様々な類のサバルタンが登場する『葦舟、飛んだ』を社会と生命文化の倫理的観点から改めて論じたものである。共同体の連帯と歓待の精神が作りあげる価値と差異について、性的暴力をうけ身籠ってしまった複数の女性の事例を通じて確認した。本作では、トポスの装置とメタファー的演出を通じて、互いに異なる他者の時間と共鳴しており、法の完全な保護を受けられない脆弱なマイノリティの生を支え得るのは、結局、連帯の共同体精神と他者歓待の倫理にあることを提示した。

第八章では、津島の遺作となった『狩りの時代』を再びとりあげ、表面的に表れた差別の問題に加え、人間社会における諸般の「悪」の問題をめぐる津島の重層的な人間理解の様相について考察した。作品の分析を通して、近代の暴力的なイデオロギーを提示する一方、単純な善悪の区分を越える様々な人間主体に対する多面的な検討を通じて、人間の本性を直視し、他人の苦痛に共感できる個人の倫理的自覚と社会的悪に陥らないための自戒の重要性について論じた。

以上、八章を通して、津島文学の独特な表現手法と美学的成就について考察した。

マジックリアリズムの特徴が見られる津島の後期文学は、重層的な時空の構成と可変的な語り手の設定、そして神話的イメージの活用を通じて多様な世界の現実および歴史と繋がっている。複数の伝統と歴史を融合し、多様な物語の主体と地域の文化表象を以てテキストのクレオール性を構築している。通文化(transculture)的特性と多彩な物語装置が際立つ津島の文学表現と美学的実験の心理的・倫理的機制として多声性と他者性への志向がある。津島の脱中心的視覚と重層的視線は人間という複雑な存在と社会、そして歴史を新たに認識させる。物語の自由を希求しながら絶えず新しい表現方法を模索し、時代と民族を超越した諸々の他者の生に近づこうとした津島の後期作品は、規範的物語と画一的思考を打破し、超国家的な文学を追求してきた作家の渾身の努力の結実といえる。